

浜から

浜組教化委員会報

発行

2023年6月20日
真宗大谷派東北教区浜組
組教化委員会

浜組組長(相馬正西寺住職)

八幡 朋行



イギリスの児童精神科医ウイニコットは、著書『遊ぶことと現実』で、「あるbeing」と「するdoing」の一对の概念を提起した。

「ある」は、ここにすでにあるとの存在感覚で、「する」は、その存在のうえに自然と生成される営みなのだ。

ただ そこにある

そうした「する」に先立つ「ある」ということを、『大経』では「無上尊」と表わし、存在は無条件に尊く、終わりなき求め続ける心をもつものと教えらる。

人間の尊厳性とも言える、この「ある」を根底から奪われたのが、福島第一原発の事故ではないか。「ここに生きる、何気ない日常…」、それら当然そこに「ある」べきものが突然にして無

くなった。

故に、この場へ「ある」を刻もうと努める人々がおられる。同時に、事故後12年間、「ある」を喪失し、痛みを抱える人の苦悩を聞き続けてくださった方もおられ、悲しみに打ちひしがれる人を支え続けてくださった方もおられる。

そしてよくよく振り返ってみると、気がつけば何を「する」でもなく、いつもこの場(被災地浜通り)に居てくださった方がおられる。それは傾聴でも支援でもない。ただそこに「ある」ことをもって、「ある」ことを失った人にとっての「ある」となっていた事実。

『大経』の本願は、釈尊の侍者として、おそばに居た阿難が、釈尊のいつにないお姿を拝見して「光り輝いておられます」と問うたところから説かれはじめる。ただそこに居る人の問いかけをもって、「ある」ことの大事さが明らかとなり、思いがけず、あらためて気づけるのだ。



晴天にそびえたつ御影堂門

慶讃法要



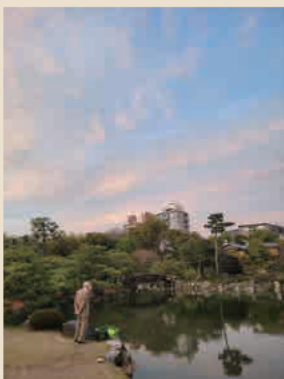
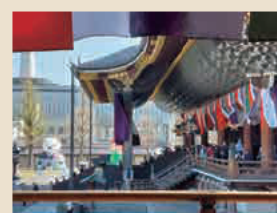
浜組団体参拝



子どもつどい in 東本願寺

慶讃法要へ、組より団体参拝をしました。また、子どもつどいへの参加もありました。

12年前の福島第一原発事故により、避難の寺院とご門徒がおられることから、寺院ごとに京都へ上山し、本場で集合するかたちとなりました。



福島県 浜通り における

「現地学習」(フィールドワーク)受け入れ対応

浜 組教化委員会では、今年度より、原発問題、地震津波災害、複合災害について学ぶことを目的に、浜通り(組内)にある、震災遺構などの施設へ、現地学習や視察を希望される団体の受け入れと、被災地の案内対応を、教化事業の一環として始めました。

震 災から12年が経過し、震災の体験を記録として残し、災害や事故の教訓を後世に伝えることを目的とした、さまざまな施設が整備されています。組としても、被災した者として、また多くの支援をいただいた側の務めとして、私たち

に何が求められ、何ができるのかとの協議の中から、現地学習の受け入れ対応に取り組むこととしました。受け入れにあたっては、組内において、震災後から、個人的に動いてこられた人の経験やノウハウを基本にして、学習内容と現地視察のモデルコースを設定しました。

これまで、数団体から現地学習の相談や申し込みを頂戴し、案内対応をさせて頂いてまいります。次年度以降も継続してまいりますと考えておりますので、学習をご検討の際はご連絡ください。

参加してくださった方の声

「訪問先で、放射線量を計測してみると、除染されている所では概ね基準値を下回っていますが、場所によっては、基準の10倍もありましたし、福島第一原発周辺では、車内計測でも線量計の感知音が鳴り響き、放射能汚染という現実を数値として実感した。」

「震災や津波被害は、徐々に復興へ向けた取り組みや工事が始まるが、原子力事故は、他の災害と比較にならないほど大規模、長期間の災害となることを認識させられた。」



体験談と意見交換

被災地寺院において、被害の様子や避難の経緯などについて学ぶ



正西寺 (浪江町)

震災遺構と伝承碑

被害の状況説明から、その教訓と災害時への備えについて学ぶ



大平山の伝承碑 (浪江町)

現況と復興施設

現在の様子を確認し、新たな施設や取り組みについて学ぶ



水素製造施設 (浪江町)

原子力災害と資料館

原発事故に関する施設において、専門家から説明を受け学ぶ



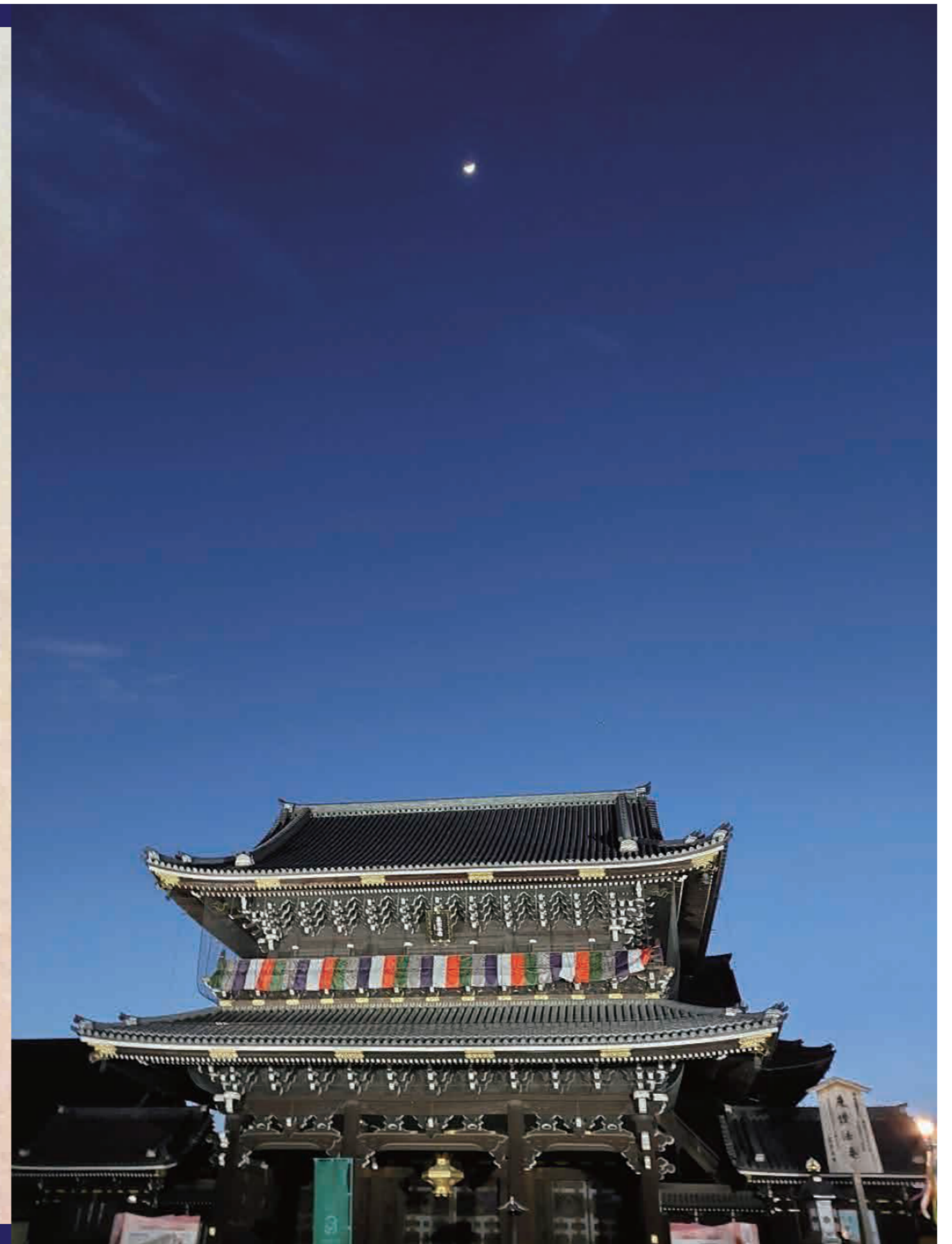
廃炉資料館 (富岡町)

光がいたり
影がうまれる
何をしてもしなくても
わたくしが
ここに在るということ

ふじうち あきこ

五行歌作者 藤内 明子 (明賢寺)

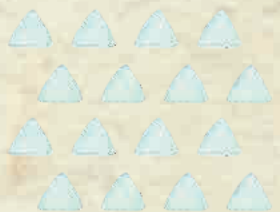
五行歌とは、日本のこれまでの詩型をもとに、歌人草壁焔太によって新しく考え出された短詩型文学です



浪江正西寺 の今

その2

事故後浪江町に避難指示が出される
2017年町の一部が避難解除となる



十二年ぶり 自坊での報恩講

満堂となった本堂に

お念仏の音が響く



2022年11月11日、穏やかな秋晴れのもと、報恩講が勤まりました。福島第一原発事故後、避難を余儀なくされた、寺院とご門徒にとって、12年もの間、自坊で勤めることが適わなかっただけに、待ちに待たれた、感慨深い法要となりました。

この法要を迎えるまでには、本堂の修復、庫裡の再建、境内地の除染などを行い、「再び法要を勤める」との情熱をもち続けてこられ、本堂はその思いに満ちていました。また、法中も参集し、同朋唱和による勤行が厳かに響き渡りました。

小丸真司住職から「原発事故後、はじめての正西寺での報恩講ですので、どうなるか心配でした。近在ばかりでなく、遠い避難先からも、大勢の方に集まっていたいただき、とても感激しています」との挨拶が述べられました。

そして、参加されたご門徒さまは「久しぶりの浪江で、皆さんにお会いできて嬉しいです」「こうして帰ってきて、そこにお寺があると、とても安心します」と語ってくださいました。

法要後には、組教化委員会による炊き出しテントが設けられ、持ち帰り記念品として、オニオンスープが配られました。

きくというこ

曾場浩代 (東北教区駐在教導)

辛さを抱えた人の話をきくのがはじまり

私は、名古屋にある大学院で法律を学び、「女性に対する暴力」についての研究をしていました。研究室では、先生と学生が車座のようになり、自分の関心事や研究テーマについて発表する時間がありました。

夫婦や恋人同士の間で起こる暴力には、目の前の人を愛しいから、守りたいがゆえに暴力という手段を選んでしまうことがあります。そうした暴力の現場に、第三者がどのように介入するのかを検討するため、当事者に聞きとりを行います。研究・調査のための聞きとりは警戒されますし、仮に相談にのることができたとしても、できれば聞きたくないような辛い内容がほとんどです。

さらに、加害者の状況を聞いてみると、加害者も実のところは生育環境において被害者であったりして、私としては戸惑いや迷いの原因になってしまいました。

被害者一方の立場からすれば、介入や保護を中心とした制度を整えればいいのかもありません。しかし根本に愛情があるにもか

浜組推進協では、機関紙として『推進協たより』を発行しています。
今号は、4月19日、曾場浩代氏を迎え、テーマを「きくということ」として開催した研修会講義の一部を掲載いたします。

わらず、暴力という手段をとらざるを得ない加害者側の問題が私の課題となったのです。すると、私の話を聞き終えた先生から「あなたはお坊さんに向いている」と言われました。真剣に法律の研究をしているのに、先生が浄土真宗のご門徒だからということがあるにせよ、そんなことをおっしゃるのは、私の話をきちんと聞いてくださっていないからではないかと感じていました。

しかし、先生の言葉がご縁となり、浄土真宗の学びがはじまり、僧侶となり今に至っています。

僧侶、臨床宗教師としての傾聴

私は現在、教務所での勤めとは別に、臨床宗教師として地元の岩手県を中心に活動しています。この臨床宗教師とは、さまざまな信仰をもつ宗教者が、協力して「傾聴」や「宗教的ケア」を行うものです。2011年の「東日本大震災」を機に、東北大学で養成がはじまり、現在は龍谷大学、高野山大学などでも取り組まれています。

養成を受けて臨床宗教師になると、各自が「傾聴」の現場に赴きます。被災地や病院、訪問看護を受けている方々に行くと、宗旨に関係なく「祈って欲しい」との声や「死」に対する不安を耳にします。

このように、辛さや苦しみを抱える人が、自らの話を聞いて欲しいという要望は多く、「傾聴」を行う人手が足りないのが現状です。現代において「お寺離れ」が進んでいるとの見解もありますが、むしろ安心して話せる場や人が求められていると感じています。

私は、震災を直接経験していません。そのうえで「傾聴」の現場で感じるのは、震災のことを何も知らない、そのような私にだからこそ話せることもあるという現実です。

13回忌を迎えましたが、話してくださる方は、何らかの事由で、ご自身が抱える悲しみを、これまで話せる場所や時間などのタイミングが合わなかったのだと思います。あるいは、他の人の経験や悲しみと比べて話すのを遠慮されてきたのかもしれない。

「傾聴」は、苦しみを抱えておられる方の話を聞かせていただきます。その人の経験や人生を分けていただくのですから、当然こちらも苦しくなりますし、疲れます。聞かずにすむのであればという思いに駆られますが、聞かせていただかなくてはならないとの思い返しがありません。話してくださる方の人生を共有することで、こちらの心が共振しているのです。

2022年度の教化活動を紹介します

住職寺族学習会 震災から12年を振り返る 「災害と〈いのち〉」

12月10日、御手洗隆明氏
(本山教学研究員)
を講師に迎えました。

御手洗氏は、東日本大震災後より被災地を歩き、
教学研究と現実の問題を、
真摯に見つめ続けてこられました。

12年の長きに亘る記録資料を解説いただきながら、
そのとき、その場で、どの
ように感じ、課題にしてこられたのかについて講義を
いただきました。



時系列で記録された資料からは、関わりの
深さとフィールドワークの正確さが窺える

慶讃法要へ向けての学び 門徒研修



2月16日、諏訪秀一氏(会津組正教
寺住職)を講師に迎え、慶讃法要
団体参拝に先立ち、親鸞聖人のご
生涯、宗祖が聞き開かれた浄土の
真宗について学ぶ機会としました。

被災地相互の連携 「現地学習」と交流

5月29日～30
日、気仙組教
化委員会の現
地学習受け入



れ対応をしました。視察とあわせて
意見交換を行い、被災地相互の連
携に向けた課題共有をしました。
次年度は、浜組から気仙組への現
地学習を計画し、新たなつながりや
取り組みへに展開できればと考えて
います。

『「平等」が叫ばれる世の中で』について考える 同朋のつどい



5月13日、太田宣承氏(花巻組碧祥
寺住職、光寿苑理事長)を講師に迎
え、寺院や施設の現場で問われる、
平等や公平性ということを踏まえ、
阿弥陀さまからの「同朋」との呼び
かけについて聴聞しました。

《編集事務担当》相馬正西 寺内
〒976-0037 福島県相馬市中野字北反町145
☎0244(35)30117

東日本大震災から12年が経過しましたが、原発事故
がもたらした苦難や問題は、被災者の生活に大きく横
たわります。
今年度、組教化委員会の重点課題を「世の声を聞く精
神」とし、親鸞聖人が生涯をかけて聞き開かれたこと。
震災の十三回忌にあたり耳を傾けるべきことを念頭
に置き、教化事業を実施しました。
東北教区としての初年度にあたり、浜組の困難な現状
を限られた紙面ですが、「推進協たより」との合同報と
して、教区内外に広くお伝えできればと思います。

編
集
後
記



地図中の水色部分が浜組、浜通りです。
福島第一原発の事故後「避難指示区域」と
なった地域もあり、組内の3カ寺と多くのご
門徒が現在も避難生活を続けておられます。